

「焦った、焦った」の障害物競争

井口 昭久

「何故年を取ると時間が経つのが速くなるのか？」という問いに種々の解説がある。その一つに「加齢に伴い印象に残る出来事が少なくなるからである」という説がある。スタートとゴールの間に注意を引きつける物が少ないと、ゴールまでの距離は短く見える。同じ100メートルでも障害物競争の距離は長く感じる。

私はある団体が主催する講演会の講師を頼まれていた。しとしと雨が降っていた。講演会は午後4時30分から始まる予定であった。時間に余裕を持たせるつもりで、ホテルに3時28分に着いた。ホテルのロビーに、開始する時間が掲示されていた。3時30分となって

いた。私は焦った。濡れたビニールの傘を持ったまま2階の会場へ行った。会場には受付の女性だけがいて、聴衆はいなかった。その女性に聞くと開始は予定通り4時30分であった。主催者側とホテルの情報交換がまずかつたようだ。

講演会の運営には不慣れの人たちが運営していたようであった。

講演が始まるまで1時間あった。そのような場合、主催者側の人が演者に気を遣って講師の相手をする。手の空いている人が私の傍に来て、「今日は雨が降っていますね」「そうですね」「昨日はいい天気だったですがね」「そうですね」「明日はどうなるのでしょ

うかね？」「どうなりますかね」というような無意味な会話をして時間を潰すのが普通である。しかし主催者側に配慮はなかった。

どこかで時間を潰さなければならなかったが、ホテルの喫茶店は満員であった。雨の中を外に出てコンビニで新聞を買い、隣のカフェに入った。この頃喫茶店のことをカフェと呼ぶらしい。カフェでビールを頼もうと思ったがメニューに無かった。アルコールを飲んで講演をやらなくてよかった。

コーヒーを飲みながら、受付で貰ってきた講演会の予定表を見て焦った。開始が4時30分で終わるのが2時30分となっていた。過去に向かっの講演は準備してこなかった。

カフェでは風船が売られていた。色とりどりの風船がおとぎの国のように浮かんでいた。孫の風船を買おうと思ったが、浮かんた風船を持って講演会場に行くのはリスクの大きい演出だと思つてやめた。

講演を始めて30分経過した頃、腕時計を見

ると秒針が目に見えて回転した。停滞していた時間の流れを取り戻すように針が回った。

電波時計はそのような仕掛けになっているらしいが、私は焦った。

講演が終わると懇親会があった。係りの人に名札を胸につけて貰った。乾杯を年配の男性がやった。「乾杯の前に一言だけ」と言つて挨拶が始まったが、長かった。ビールの入ったコップを持って待った。「最後に一言」と言つたので、そろそろかなと、右ひじをあげて乾杯をしようと思った。しかし「なお」と言つて挨拶は続いた。

懇親会が終わわり、帰り際に胸につけていた名札を見て焦った。私の名札は違う人の物だった。長い一日だった。

